

『龍神の贅嫁は甘く啼く』

著：中嶋ジロウ

ill：八千代ハル

「ふふ、そう硬くなるな。……安心して私に身を任せればよい」

緊張のあまり全身が石のようになってしまった翡翠から舌先を引いた澄江が困ったように笑いながら、花嫁衣装の衿を開いた。

「あ、っ……！」

みだりに肌を見せてはならない、と翡翠は小さな頃から強く言いつけられてきた。

反射的に肌を隠そうとして胸元を押さえようとする、澄江の唇が首筋へ降りてきた。

「生まれたままの姿を見せておくれ、私の花嫁」

ともすれば意識が奪われそうになるほど甘い声で囁かれながら首筋に音を立てて吸い上げられると、翡翠は無意識に漏れそうになる吐息を押し殺した。

肌を人目から隠さなくてはならないのは、自分が龍神のものとなる運命だったからだ。だとすれば、澄江に自分の肌を隠す必要はなのだろう。

それはわかっているけれど、羞恥心が先に立ってしまう。

衿を抑えた手を離そうとする指先が震える。

「翡翠。貞操観念の強い子は好きだが、そうあまり可愛らしいと虐めたくなってしまうぞ？」

「いじ、め……っ？ っ、あ」

指が強張ってしまっってなかなか手放せずにいる衿の中に無理やり忍び入ってきた澄江の指先がひやりと肌の上を這ったかと思うと不意に胸の飾りに触れ、翡翠はぴくんと肩を震わせた。

首筋で澄江がふふと笑い声を上げる。その吐息が妙にくすぐったい。

ざわついた感覚が自分の中に湧き上がってきて、翡翠は戸惑って身を振った。

「ほら、じっとしている」

揶揄するような声を弾ませながら、澄江が翡翠の胸の上をきゅうっと摘み上げた。

「ん、あっ！ あ、あっ」

瞬間、どうしようもなく体が痙攣するように震えて、翡翠は慌てて自分の口を掌で塞いだ。

じっとしていると言われたのに、じっとしていられない。

翡翠を摘んだ澄江の指先からじんじんと痺れるような感覚が広がってきて、体の芯までむずむずとしてくる。

「あ、あ……っお許し、……お許し下さい、っ」

思い切り目を瞑って歯噛みするように言うと、首筋から唇を下降させていく澄江がちらりところらを窺った気配がした。

澄江が怒っていないことはわかる。むしろ今は、翡翠の反応を楽しんでいるようだ。しかしその劣情

がじわじわと高まっていくのが感じられて、翡翠には耐え切れない。こんなに身を寄せた状態であられるもない劣情を向けられては、翡翠にまで伝染してきそう。

「少し胸を弄っただけで音を上げてしまうのか？ 困った花嫁だな」

「も、申し訳ありませ——……っ、」

言葉とは裏腹に笑い声を漏らした澄江の唇が、もう一方の胸に吸い付いてきた。

「あ、っう——ふ……っ！」

今度は背が反って、寝具の上の膝が起きてしまう。無意識にいやいやをするように肩をばたつかせながら、翡翠は顎を上げて熱くなった息を夢中で吐き出した。

澄江の舌先が、翡翠の胸の先端を押し潰すように捏ね始める。

ちゅく、と唾液の水音が響くだけで翡翠は必至で抑えた掌の下からくぐもった声を上げて背筋を震わせてしまう。

じっとしていなければいけないと思えば思うほど、寝具を揺らして身悶えてしまっていた。

「しどけない胸を晒して……本当に悪い花嫁だ。神を墮とそうという気か？」

澄江の声音は笑っている。

不快に思われているわけではないとはわかっているが翡翠には理解できない言葉で諷められているようで、どうしていいかわからない。

「もう、し……っ申し訳ありませ……っ、お許しくだ、さっ」

だから謝罪の言葉しか口にする事ができず、翡翠は知らず鼻にかかったような声で哀願するように繰り返しながら自分の体の奥に燻ぶる熱に戸惑っていた。

澄江の唇が、指が自分の体に触れるたびにぞくぞくとしたわななきが背筋を走っていく。それどころか、澄江の長い髪やふわりとした薄衣が垂れてくるだけでも声を上げそうになってしまっている。

寒くもないのに肌が粟立って、絶え間なくぴくんぴくんと震えてしまう。

「翡翠お前、夜伽は初めてなのだろう？ ずいぶんといやらしい反応をする」

口唇を離して舌先だけを覗かせた澄江がこちらを仰ぐと、思わずその顔を見下ろしてしまった。そうするように澄江が望んだために、促されたのかもしれない。

「……っ！」

視線を合わせて、すぐに顔を背けた。

澄江の赤い舌に絡め取られて赤く色付いた胸の先端がまるで女のようにぷっくりと勃ち上がっていた。唾液に濡れ、それは澄江のいう通りひどくいやらしい姿に見えた。

体が、熱くなる。一人では熱を持って余してしまうほど。

翡翠の意志に関係なく澄江の舌を押し返す胸の飾りを、くにくくと押し潰すように捏ねられる。そのたびに甘美な痺れが翡翠を襲って、じっとしてられない。

「あ、あ……っも、もう、っお許し下さい……っう、ふ……っ！」

ひとりでに赤くなった目元を腕で隠して寝具に頬を押し付けると、澄江は聴覚を奪めようとするかのように唾液を啜る音を立てて再び胸に吸い付いてきた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>